

一人ひとりが環境について考え、次の世代へと受け継いでいく社会へ——
環境省では、「持続可能な開発のための教育（ESD）」の促進
事業を行っています。モデル地域に選ばれた、各地の取り組みを紹介します。

里海から学ぶ。

高知県柏島

これからの世代も、今の世代も、すべての人々が満足して生きていける——そんな、持続可能な社会を実現するためには、私たち一人ひとりが、世界中の人々や将来の世代、自然環境と深く結びつきながら生きていくことを意識し、行動していく必要がある。そのための教育を進めようと2005年からスタートした国際的な取り組みが、「国連持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development : ESD）の10年」だ。環境省では、持続可能な地域・社会づくりを目指し、環境保全を入口とした地域の各種課題を解決するため、多様な立場の関係者や幅広い世代が参加する、地域に根ざした各地の取り組みをESDのモデル事業として採択し、2006年からサポートしている。



四国側の高台から望む柏島。美しい海では、マグロなどの養殖を行っている。

柏島に生まれ育った亀尾猶蔵さんから、島の歴史について聞く学生たち。



観察したサンゴの白化について説明する神田先生。



実習後に、ずらりと並べて干されたシュノーケリング用のフィン。



シュノーケリングで、海に棲む生物を観察する。

柏島の住民や、高知県水産試験場の田井野さんを変えて行われたパネルディスカッションの様子。



四国の西南端に位置する高知県・柏島の取り組みは、地域に密着し、その特性を活かしたESDの活動として注目されている。
約1000種もの魚類が棲む柏島の豊かな海は、漁業を営む島の人々の生活を支えてきた。しかし、漁業が次第に不振になると共に、柏島はさまざまな問題を抱え始める。ダイビングスポットとしても有名な柏島には、毎年多くの観光客が訪れるため、観光業と漁業の共存が問題となってきた。また近年、地球温暖化の影響で、海藻が生えなくなる「磯焼け」という現象が起き、海の環境の悪化という問題も出てきている。
こうした島の現状をふまえ、高知大学客員准教授（当時同大非常勤講師）の神田優さんは、柏島の豊かな自然を守り、人と海が共存できる環境を作っていくため、2002年にNPO法人黒潮実感センターを設立。「持続可能な里海づくり」をキーワードに、地元住民、学校関係者、漁業従事者、ダイバーなど異なる立場の人々と共に、環境教育や保全の取り組みをスタートした。



3日目には、浜辺に漂着したごみのクリーンアップが行われた。ごみは、軽トラックで3回往復しなければならぬほど大量に集まった。黒い球状のブイなど、養殖用のものが漂着していることも多い。



発砲スチロールのごみは、サイズ別に細かな種類に分別して、数をカウントする。



観光客がバーベキューの後放置していったごみも残っている。



3日目には、地元の食堂でトコロテン作りの実習も行われた。蒸溶かしたテングサを、ざるで濾しているところ。



テングサは、何度も水洗いと天日干しをくり返すことで、徐々に臭みがとれてくる。



右が干す前のテングサで、左が何度も干して色が抜けたもの。

「人が海からの恵みを一方的に享受するのではなく、人も海を耕し、育み、守る。それが「里海づくり」の考え方です」と神田さんは語る。

今年8月、柏島のESDの一環として、黒潮実感センターと高知大学が開催した「土佐の海の環境学・柏島の海から考える」という共通講義では、3日間にわたって柏島での現地実習が行われ、高知大生や県内の高校生約30人が参加した。このプログラムには、自然の豊かさを知る「自然科学」的な実習と、島の生活文化や問題について学ぶ「社会科学」的な実習という二つの柱がある。

自然科学的な実習のメインは、シユノーケリングによる海洋生物の観察。色鮮やかな魚の群れを観察し、「ピンク色をしたソフトコーラルが、本当にきれいでびっくりしました」と理学部3回生の南田美佳さんは島の自然を満喫していた。

社会科学的な実習では、島の生活や歴史、現在の問題を知るため、住民とのさまざまな交流のプログラムが用意されていた。島内探索では、島の長老的な存在の亀尾猶蔵さんが、「昔はもっと海がきれいでも釣れたもんからキビナゴがいくらでも釣れたもんです」と教えてくれた。

公民館で行われた現地講義では、高知県水産試験場の田井野清也さんが、磯焼けによって海藻の森である藻場が失われている問題を指摘。島の人々を交えたパネルディスカッションでは、島の食堂でトコロテン作りを手伝う浜野三代さんが「ここ数年、トコロテンの材料のテングサがどんどん減ってきてきちよるので、危機感を感じとります」と現状を訴えた。学生たちにも、環境の変化が島の人の生活に直接影響していることが実感できたようだ。3日間を終え、「ただ自然がきれいというだけではなく、島の人とふれあえたことで、この島のことが深く理解できた気がします」と参加者で理学部3回生の舟谷亮二さんは感想を語ってくれた。

地域に根付き、さまざまな世代が共に取り組みを続けていく——里海は、こうして育まれていくのだ。

NPO法人黒潮実感センター
〒788-0343
高知県幡多郡大月町柏島6225
電話 088-0167-8022
e-mail: kuroshio@divers.ne.jp
HP: http://www.orquesta.org/kuroshio



こうしたイベントを通じて、交流が進むシニアボランティアと小学生たち。



上／発電機で起こした電気で、扇風機を動かす。自分たちの作った燃料で動く扇風機を見て、子供たちから歓声が上がります。下／精製したBDFで発電機を動かし、電気を起こす。子供たちは興味津々で見守っている。



高校生のお姉さんがサポートして、廃油を精製するために必要な薬品を、精製機に流し込む。西淀川高校が取り組む「菜の花エコプロジェクト」では、菜の花を育てて菜種から油を精製し、バスなどの燃料に役立てている。



右／飛び散ると危険なため、サングラスをして薬品をかきまぜる。左／精製する廃油を、真剣な表情で流し込む。



精製前の廃油(左)と、精製後のBDF(右)。

●ESD推進事業についての詳しい情報は下記URLをご覧ください。
<http://www.env.go.jp/policy/edu/esd/index.html>

財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団)
 〒5550013
 大阪府大阪市西淀川区千舟1-1-1 あおぞらビル4F
 電話06-6475-8885
 e-mail: webmaster@aozora.or.jp
 URL: http://www.aozora.or.jp

汚染などは改善されたが、依然、大気中の二酸化窒素は上限値ぎりぎり推移している。そこで、地域のNPOや教育関係者等が集まって「持続可能な交通まちづくり市民会議」を開催。その中で、個々の団体間のつながりを深めて活動に広がりをもたせること、そして世代間交流を行い、ともすれば風化しがちな公害克服の歴史を伝えていくことが、ESDを進めていく上での目標として設定された。

今回の取り組みも、小学生と高校生、シニアが世代を超えて交流し、環境に優しいBDFという燃料を通して、交通問題を考える好機となった。発表を終えた高校生からは、「もっと自分たちの活動を発表する場を見つけて、活動内容を見直すきっかけにしたい」という声があり、小学生たちも「天ぶらを食べた後の油が車を動かせるってすごい」と目をキラキラさせた。

人と人がつながれば互いに影響を与え合い、環境を考える環がどんどん大きくなっていく。未来の住みやすい環境をつくるため、西淀川区の人々は最初の一步を踏み出している。

「廃油を機械に入れてくれる人は手をあげて」。高校生の問いかけに、元気な小学生の手がパッとあがる。夏休みの一日、バイオディーゼル燃料(BDF)について教わっているのは、大阪市の環境学習館「生き生き地球館」のエコクラブに所属する子どもたちだ。説明するのは、大阪府立西淀川高校のエココミュニケーション同好会のメンバーと教諭。(財)公害地域再生センターによって開催されたこのイベントには、NPO「シニア自然大学」のボランティアも参加している。高校生たちは、日頃取り組む「菜の花エコプロジェクト」にふれながら、環境にやさしいBDFについて解説していった。

このように、大阪市西淀川区ではESDを念頭に、環境問題に取り組む団体が連携するさまざまなイベントが行われている。背景にあるのは、自動車による大気汚染の問題だ。

西淀川区は阪神工業地帯にあり、かつて公害の指定地域だった。住民や行政、企業等の努力で水質や土壌

写真／石原敦志
 文／柳澤美帆

続く、つながる、教育の環。

“つながる”教育。
 大阪府大阪市西淀川区